

二〇二二年度 一般入学試験 問題(国語)

次の文章は、川上弘美氏の「でこぼこに」という文章の一節である。よく読んで、後の設問に答えなさい。(なお、文中の*は、後に注のあ
ることを示す)

子どものころに読めなかった本が、二冊ある。『風の又三郎』と『星の王子さま』だ。『風の又三郎』が読めなかった理由に関しては、「そこにはa リロ整然というものがなく、子供の世界の模^も糊^ことしたさまが正直に描かれていたからである。そこには善も悪もなく、寂しさや暁の幽かな光のようなものだけが、世界の方向を決めていたからである」と以前自分でb プンセキしたことがあり、つまり子ども自身に子どもの中の混沌^{こんとん}をあらわに見せる賢治の物語は、わたしをおびえさせた、ということなのだ。『星の王子さま』の方は、王子の美しさがつらかった。純粹さがつらかった。わたしは、自分が不純な子どもだと自覚していたからだ。子どもの頃の読書においては、わたしはいつも物語の中の世界を、自分と同期させており、目の前に物語の中の風景や人物が実際にあらわれたとしたら、A 自分はそれに耐えうるか、という視点で読書をしていたのだ。後年、読書という経験をさらに重ねるようになり、本の中の世界が自分の想像の埒^{ちが}外^がだったとしても、あるいは自分がその中で①と呼吸できないとしても、またあるいは自分とあまりに重なってそのためにかえって息苦しくなったとしても、なに、それは読書という②した「遊び」の中でのことなので、何を気にすることもないのだとわかってからは、どちらの本も、たいへんに好きになったのだが。『風の又三郎』も『星の王子さま』も、たしか本好きの大人が、子どもにとってよい本を、という気持ちでプレゼントしてくれたものだった。その時に愛読できなくて、申し訳なかった。

プレゼントではなく、貸してもらった本もある。実家は本好きかつ麻^{あし}雀^{じやくん}好きな大人が出入りする家で、だから大人が麻雀をしている間、子供のわたしがc タイクツしないように、中の一人が愛読するマンガを貸してくれたのである。白土三平の『忍者武芸帳』全十二巻だった。デパートの包装紙を裏返したd テセイのカバーがかかっており、表紙をめくった見返しには、「磯野 1966.9.14」とマジックで記入してある。大切なマンガを、小学生に貸してくれた「磯野」さんは、今どうしているのだろう。そのうえ、小学生だったわたしは、『忍者武芸帳』を愛するあまり、いつまでも借りつづけ、やがて「磯野」さんの足が実家から遠のいたのちも何回も繰り返し読みつづけ、今もe ホンダナの一隅には「磯野」のf ショメイ入りの『忍者武芸帳』はあるのだ。あまり何回も読んだので、デパートの包装紙はやぶけ、うちの何冊かのカバーは、もうない。

小学生だったわたしは、B『忍者武芸帳』の中の生死観に、しんから共感したのだ。体が弱かったので、何回か手術を受けたり入院したりしていた。難病の小児専門の病院に入院していた時には、大部屋の、隣のベッドの友だちがある日一人部屋にうつり、その後③と亡くなる、ということが何回かあった。昭和四十年代、日本はまだ病院死よりも在宅死の割合の方が高かったが、都市部では在宅死は④減りつつあり、病院以外で出会

う子どもたちは、あまり「死」というものに接していなかった。生きることこそが輝かしいことだと、たいがいの子どもが思っていた。それはもちろんそうなのだが、生きることが輝かしいということは、ややもすれば、死ぬことは敗北だという考えにもつながりうる。

『忍者武芸帳』には、おびただしい死が描かれていた。死と生は、この本のなかではまったくの同等だった。死んでゆく者たちは、不幸なのではないのだ。死は必ずくる。早いか遅いかの違いはある。生はここにある。どう生きるかにかかわらず。価値のある生があるのではなく、生きること自体に価値があるのだ。どのように死ぬかで不幸が決まるのではなく、幸不幸にかかわらずみな死ぬのだ……。読んでいて、自由、という感覚をはじめと感じた物語だった。その後『忍者武芸帳』と同様ⁱとりになる、手塚治虫の『火の鳥』ⁱⁱの二つのシリーズは、小学生のわたしの「バイブル」だったし、今もバイブルなのである。

生と死、というのは、小説及びさまざまな分野の主要なテーマなのであるが、子どもの頃読んだ本には、そういえば死の影が濃いものが、あんがい多かった。これも、小学生のころから今にいたるまで愛読している『かぎのない箱』『トンボのおひめさま』『メアリー・ポピンズ』のシリーズ、『ムーミン』のシリーズ、講談社世界童話文学全集の『日本文芸童話集』などなど。どれも、子ども向けに書かれた優しい文体の物語であり、おもてだつて「死」はほとんど描かれていない。けれど、どの物語の中にも、死につづく闇の気配がある。生きていることCが、多く書かれている。

これらの中でことに繰り返し読んだのは、『日本文芸童話集』だった。大正時代に鈴木三重吉により創刊された『赤い鳥』からの諸作品、そして昭和初期から書かれるようになった生活童話というカテゴリーの作品などがおさめられている本で、監修には、小川未明、志賀直哉、辰野隆、編集委員には与田準一、村岡花子らの名がみえる。浜田廣介「泣いた赤おに」、芥川龍之介「蜘蛛の糸」、新見南吉「ごんぎつね」などの、人口に膾炙かいたしたお話も載っていたが、それよりも子ども時代のわたしが惹かれたのは、小川未明「牛女」、佐藤春夫「おもちゃの蝙蝠」、榎本楠郎「お花見」、与田準一「小さな町の六」などだった。物語の筋を説明するのは、見た夢を語るのと同じくらいg「ブスイ」なことのような気がするのだが、今は手に入りにくい本なので、少しばかり説明をば。

小川未明「牛女」は、ひどく背が高く体が大きいために「牛女」と村人から呼ばれていた、^{づめ}蟬のシングルマザーが、死んでからも一人息子を愛えて、ある時は山の雪形となり、またある時は山から飛んでくる蝙蝠の^{こもり}大群となつて、死んだのちも息子を守りつづけるお話。佐藤春夫「おもちゃの蝙蝠」は、ボール紙でつくったぜんまいじかけのおもちゃのこもりが、天にのぼりたくて飛んでゆく話。けれど、おもちゃ職人がどんなに良いぜんまいを取りつけてやっても、天には届かず、最後に——「なにごとも人だのみではだめだ。ほんとうのこもりになりたい」といつて（こもりは）ないた。——と終わる。榎本楠郎「お花見」。*日華事変の直前の時代が舞台となつている。父親が大学の先生である語り手の小学生の女の子は、「朝鮮の人がふたりに、満州と台湾の人がひとりずつと、のこりはせんぶ中国本土の人」である留学生八人と彼女の家族と共に、井の頭公園へお花見にゆく。ささやかな宴をもよおし、鬼ごっこをし、夏ミカンでキャッチボールをしたあとには剥いてむしやむしや食べ、記念写真を三枚hトつて終わったお花見の三ヵ月後に日華事変が始まり、「中国の留学生の徐さんや張さんたちは、みんないっしょに、わたしのお

とうさんのところへおわかれにきて、さびしそうにお国へかえっていきました」――そして、「その年の八月のおわりに、上海からえはがきをくれたきり、どこへいったのか、おとうさんにもおたよりがなくなってしまうました。でもわたしは、そのうちきつと、徐さんたちが、あのお花見のしゃしんの中のかおのように、にこにこして、⑤たずねてきそうな気がしてなりません。」と結ばれるのである。

与田準一「小さな町の六」は、「六は、ひとりものでした。六は、小さな町の、やくばのふれあるきのやくめをしていました。あーしーたー あーさー。六は、いつでも、そう、ながくひっぱって、よびあるきました。どうぶつのような声でした。あーしーたー あーさー やーくーばーでー、あーかーんーぼーのーちーちーのー *はーいきゅーうーがーあーんる」という、「六」を描写した、短い物語。

こうして説明してみてもわかったのだが、いずれもDマイノリティーを描いたお話である。共感をよりどころにしていた子ども時代、好みのお話はマイノリティーを描いた物語ばかりだった、という昔の自分を、今あらためて知って、なかなかiカンガイ深い。

病弱で、すつとんきような帰国子女で、クラスのみなど協調するのが苦手だったことが理由でいじめられていたから、わたしはマイノリティーであるという自覚をもっていた、ということもいえるが、そもそも子どもの成長の過程は、すなわち自分の周囲の社会とながりをつくってゆく過程と重なるものなので、幸運にも円滑に成長できた子ども以外は、社会とのつながり方がいつも不安定で、その結果大なり小なり自分がマイノリティーだと感じているはずなのだ。円滑な成長などというものは、ごく稀にしかやってこない。Eたいがいの子どもは、でこぼこにしか成長できず、でこぼこにしか生きてゆけない。子どものためのお話が、jコドクと死の影と世の中の中心ではない者たちを描くのは、だから、きつと当然なのだ。わたしはそれらの物語を愛した。それらの物語になぐさめられた。それらの物語を友と感じていた。そして、大人になった今も、同様である。まあつまり、わたしは大人になっても社会とうまくつながりをつくれないと感じているということになるのか。小説を書きつづけているのも、そのためだろう。「お花見」の、徐さんや張さんのことを、わたしは今もときおり、夢にみるのである。

(注) ○日華事変Ⅱ日中戦争のこと。一九三七年に起こった、日本の中国侵略戦争。

○はいきゅうⅡ配給。戦争時代などに、統制経済のもとで数に限りのある物資などを、一定量ずつ消費者に売ること。

(設問)

問一 a j のカタカナを漢字になおしなさい。

問二 空欄 ① ⑤ に入れるのにふさわしい語を、次の選択肢の中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア さっぱり イ どんどん ウ のびのび エ ひっそり
オ ひよつくり カ ひろびろ

問三 波線部 i 「とりこになる」、ii 「バイブル」について、ここでの意味を、簡潔に記しなさい。

問四 傍線部 A 「自分はそれに耐えうるか」とあるが、ここに言う「耐える」とはどういう意味か、次の選択肢の中から適当と思われるものを二つ選び、記号で答えなさい。
ア がまんする イ 拒絶する ウ 同等の存在価値を持っている
エ 追従する オ 仲よくする カ 理解する

問五 傍線部 B 『忍者武芸帳』の中の生死観」を、本文中でわかりやすく説明している部分はどこか、その最初の五字を抜き出して記しなさい。

問六 空欄 C に入れるのに最も適当な語句を、次の選択肢の中から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 不穏さ イ 不十分さ ウ 不審さ エ 不確かさ オ 不便さ

問七 傍線部 D 「マイノリティーを描いたお話」とあるが、本文で紹介されている「小さな町の六」の主人公「六」は、はどのような人物だと考えられるか、五〇字以内でわかりやすく説明しなさい。

問八 傍線部 E 「たいがいの子どもは、でこぼこにしか成長できず、でこぼこにしか生きてゆけない」とあるが、それはなぜか。本文中の言葉を使って、四〇字以内で説明しなさい。

問九 本文中に名前の見られた近代作家、(宮澤)賢治、志賀直哉、芥川龍之介、佐藤春夫の中から一人を選び、説明しなさい。